

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集部が選択して紹介いたします。

『近代数学史の成立 解析篇
オイラーから岡潔まで』

高瀬正仁 著 | 東京図書 2014、327pp.

多変数複素解析学において世界的に著名な数学者であり、晩年はそのエッセイで広く世に親しまれた岡潔(1901-1978)は、現代的な数学の抽象化につぐ抽象化を指して「冬」の景色のようであると評した。他方自らの数学は「春」の兆しを待望するものであり「春」そのものを感じさせるものでありたいと述べている。数学はあくまでも冷徹な論理的なものからなり、何か血の通った人間的なもの(岡潔はそれを『情緒』という言葉に集約した)は片隅に追いやられているというのが世情の数学に対する一般的な理解だろう。岡潔はそのような“偏見”に対し数学を数学たらしめるものは最終的には『情緒』であると断言するのである。

今回紹介する『近代数学史の成立』の著者である高瀬正仁は岡潔の数学観に大いに共鳴し、欧州の古典的数学書の翻訳を行い、また、それら労作を背景の一部として「春」の数学史を積み上げていった。オイラー(1707-1783)、ガウス(1777-1855)、アーベル(1802-1829)、ヤコビ(1804-1851)、コーシー(1789-1857)、リーマン(1826-1866)・・・。解析学における燦然たる系列であり、これら大数学者の数学はそのまま『近代数学史の成立』の主題そのものでもある。「春」の数学とはいかなるものか、『近代数学史の成立』を一読すれば、その展望を得ることができるだろう。また、岡潔の数学・数学観は孤立したのではなく、『近代数学史の成立』において明らかにされる正統的な数学の後継であることも了解されよう。

他方で『近代数学史の成立』は「冬の荒れ野」の数学をその副旋律としている。「冬の荒れ野」の数学における“行き過ぎた”抽象化とはいかなるものであり、「春の野」の数学とはどのような差異があるのか

も高瀬の主要な関心事の一つなのである。高瀬は数学史的には、「春の野」の大数学者リーマンのリーマン面を複素解析学の『母なる大地』と称したワイル(1885-1955)の業績がかえって「春」と「冬」の分岐点になったとしてその詳細を伝えている。

勿論現代的な数学の立場からは高瀬の立論に反論があるだろう。今回紹介の任に当たった私自身「冬の荒れ野」に身を置き、そこから養分を得てきたと考えている。「春の野」の数学は耕し種蒔く人の数学であり、開拓者の喜びと同時に途轍もない困難を伴うものでもある。しかしながら、「冬の荒れ野」の『開拓者』は目指す地平は違えど、「春の野」の数学者と同様に困難な責務を果たしているように私には思える。『近代数学史の成立』を繙くなら、多様な数学観の存在にも想いを馳せて欲しい。

評／『彦根論叢』編集委員／谷川義行

『非常時のことば 震災の後で』

高橋源一郎 著 | 朝日新聞出版 2012、215pp.

最近読んだ(読みつつある)本*に高橋源一郎が寄稿していて、その論考の中に「相手のことを、すごく簡単に否定する考え方」という一節があった。その本は現在の日本において大きく広がりつつある知性の不調について論じたもので、その不調のあり方を煎じ詰めていうと先の一節になる、というわけ。もっとも高橋は「相手のことを、すごく簡単に否定する考え方」を採用している、と脊髄反射的に相手に投げかける『態度そのものが知性の不調の証であるとして、知性、また、知的であるとはどういうことかから迂回的に検討を始めるのだけれど。高橋によると、知性とは「歪み」を見つけ描くことのできる力、「上」(俯瞰的になればなるほど細部はかすみ見えなくなる)へではなく「下」(隣り合うほどに近づいて初めて見えるものがある)へ向かう視線であるという。

高橋は「あの日」を境に“今までのように”物事を見聞きし感じるができなくなったということから『非常時のことば 震災の後で』を書き始める。「ことばを失った」、と。でも、それは悪いことなのだろうか?『非常時』に直面したとき、むしろ絶句し、言葉が出ないことこそ常態ではないのか?「ことばを失って」、高橋が改めて気づいたのは、「考える・考えている」ということの多くが「どこかにある正しい考え方を探しているだけ」で、その実本当には“自分自身”では考えていないのではないかということだ。それが『非常時』、ありきたりの言葉では本来名指ししえない状況下で端なくも露呈した。高橋は「あの日」を境に今までだったら読めたであろうものが多く読めなくなったと告白する。他方で、読めるものがあって、それは上の言葉で言えば、「歪み」を歪みとして捉え「下」へ向かうまなざしを持った「書きことば」達だったにちがいない。

『非常時のことば』は「あの日」以降も高橋が読む

ことができたという文章の(長めの)抜粋と、その論考からなる。理解を絶する状況についてその歪みは歪みのままに、どこか遠くにではなく足下に届くように書かれた多くの「書きことば」を目にすることができる。一例を挙げれば、石牟礼道子『苦海浄土』、川上弘美『神様 / 神様(2011)』、リンカーン『ゲティスバーグ演説』……。これらを読むと、『非常時』はむしろ遍在しており、私も含め多くがその「歪み」に気づかないか見ないふりをしているだけなのでは、という気にさせられる。「相手のことを、すごく簡単に否定する考え方」は日々容易に目に付くようになった。「あの日」以降も以前と同じようにことばが溢れかえっているながら、“歪み”を見つけ、“下”へ向かう力は日々衰えているのかもしれない。

*『日本の反知性主義』晶文社 内田樹編

評／『彦根論叢』編集委員／谷川義行

『バブルの正しい防ぎかた 金融民主主義の すすめ』

ロバート・シラー 著、黒坂佳央 監訳 |
日本評論社 2014、228pp.

原書は“The Subprime Solution: How Today's Global Financial Crisis Happened, and What to Do about It”であるが、訳者陣の判断により上記邦語タイトルとなっている。この聞き慣れない「金融民主主義」であるが、本書では第6章において頁が割かれている。モラルと金融工学の統合によって構築される金融民主主義は、各種の金融イノベーション推進、およびそれらによる恩恵を広く社会全般に普及させることで成るとする。そのような社会の構築が、サブプライム危機の後遺症軽減に寄与し、さらには将来の類似危機の防止を可能とすると主張する。

具体的に12もの提言が紹介されているが、原書が比較的小著であることに加え、専門書として書かれているわけでもないため、一読しただけでは提言群の賛否を推し量れるものではない。発刊以降実現にこぎつけたもの、更なる議論の活性化が期待できるもの、未だ学者レベルの思考実験に留まるもの等、実行可能性はまちまちとしか言えない。

著者は一昨年ノーベル経済学賞を受賞したアメリカ人であり、本書が念頭としているのも米国金融制度である。米国の固有名詞や固有制度が織り込まれているため、読み進みにくい箇所が無いと言えようことになる。ただし、重要なメッセージをクローズアップさせるため、第7章には「解題」が収録されている。訳者陣によるわかりやすい解説は、改めて原書の価値を高めるだろう。

評／経済学科教員／得田雅章

『年収は「住むところ」で決まる 雇用とイノベーションの都市経済学』

エンリコ・モレッティ 著、安田洋祐 解説、池村千秋 翻訳 |
プレジデント社 2014、360pp.

雑誌でよく、高額所得者はどこに住んでいるのかという下世話な特集を目にするが、本書は因果関係が逆で「イノベティブな人材・企業の集積地に身を置くことが、結果的な高収入に繋がる」という論旨となっている。いや、それではまだ不正確であろう。筆者の主眼はむしろサブタイトルにあるように、イノベーションの生成過程とその効用を、都市経済学と労働経済学の観点からわかりやすく説いたものに他ならない。多くのケースとともに関連研究が紹介され、日本でも議論になっている以下のような諸問題に、明瞭な回答を示す。

- ・ ネットやITが普及してもなお、イノベーション産業には地理的な近接性が重要である
- ・ イノベティブな人材の都市流入は、その都市内の一般労働者にとっても雇用環境改善に繋がる
- ・ 移民（ただし高学歴）流入による地域の経済波及効果は、ネットの意味が高い

いちいちが腑に落ちるものであり、読んでいて気持ち良かった。

そもそもイノベーションとは何であろうか。ミクロ的基礎付けを置いたRBC（実物的景気循環）モデルや、さらに不完全競争等を取り入れたDSGE（動学的確率一般均衡）モデルといった現代マクロ経済モデルにおいて、知識や技術（一般的に「A」と定義付けられている）は実体経済を活性化させる源泉として位置付けられている。ただし、その知識や技術をどうしたら増加させることができるのかについては、抽象的な議論やアドホックな設定でごまかしている感がある（特にRomer（2012）やGali（2008）のようなテキストレベルでは）。本書を読んで、これらのとらえどころのない概念の片鱗がつかめたような気がした。

イノベーションには良質な人的資本の創出および

集約が必要で、そのために教育の果たす役割が大きいと最終章では述べている。大学教育に携わる身としては、改めて自身の果たす責任の重大さを痛感させられる章であった。また、日本においては「集約」の程度を考える上で、直近の課題「地方創生」ととの関連をよくよく吟味する必要性を感じた。

一方で不安に感じることもあった。イノベーション産業の集積に成功した都市がますます富み、そうでない都市との格差は経済のみならず社会、文化的側面においても広がっていくという。学歴や経済的階層が地理的にきれいに隔絶された社会というのは、果たして幸せな社会といえるのだろうか。ある意味アメリカは、日本や多くの先進国に先駆け、壮大な実験をしているといえなくはないだろうか。願わくは、8年前の金融の暴発のような悲惨な事態に繋がらないことを。

評／経済学科教員／得田雅章